



スポーツイベントと 持続可能性

学生団体おりがみ代表/SUSPON Youth部会 都築 則彦

東京2020大会を学生みんな さまざまな主体を巻き込み、創造的な市民活動をリード

東京2020大会への挑戦は 「ゴミ拾い」から始まった

2020年の東京五輪・パラリンピック開催決定から1年が経とうとしていた2014年夏、大学生だった筆者は「学生団体おりがみ」(写真1)を結成しました。東京2020大会に関わることで、今までにない生活を送ることができるのではと考えたからです。

「おりがみ」という団体名は、「おり」ンピック・パラリンピックを、「が」くせい、「み」んなで盛り上げようの頭文字を取ったものです。今年からはSUSPON(持続可能なスポーツイベントを実現するNGO/NPOネットワーク)のYouth部会に参加しています。

五輪・パラリンピックに関わるのに何をすれば良いのか分からない。このことが今も昔も大きな課題になっています。筆者は現在、大学院で五輪・パラリンピックのボランティアに

ついて研究していますが、前回(1964年)の東京大会のアルバイトスタッフや日本赤十字語学奉仕団も、1998年の長野冬季五輪の大会ボランティアもこの課題に直面したようです。

「おりがみ」も設立当初、五輪・パラリンピックへの関わり方を見ることができず、苦悩しました。しかし、みんなで思い悩んでいるうちに、あることに気がつきました。まずは動き出さないと何も始まらないのではないか、ということです。私たちは「ゴミ拾い」から始めることにしました。東京2020大会という大きな舞台で活動することを夢見ながら、毎週日曜の朝8時、池袋駅(東京)に集合してゴミを拾い、その後、ファミリーレストランで東京

2020大会への参画アイデアを語り合いました。こうした活動の積み重ねが、現在の活動の原点になっています。

学生が軸になり、多くの人 関われる東京2020大会に

小さな活動を積み重ねていくうちに活動規模も徐々に拡大し、2018年には、東京2020大会参画プログラムの主体団体に認定されるまでになりました。五輪・パラリンピックの公式イベントを申請する権利を持てるようになったのです。これまでの参画プログラムの企画・協力件数は19件。メンバーも40大学210人まで増え、今では東京2020大会を動かす最大規模の学生団体として、さまざまな市民活動を企画・運営し



写真1 「学生団体おりがみ」の集合写真



写真2 今年8月に復活した「うえの夏まつり」の盆踊り



写真3 聖火リレーの夜企画として「キャンドルナイト」を提案する予定だ

ています。

活動を続ける中で、五輪・パラリンピックでは募集人数を大きく上回るボランティア希望者が集まり、定員からあふれてしまった人にはボランティア活動をする機会がないことを知りました。これだけ「ボランティア」への関心が高いのに、多くの人たちのボランティア活動の第一歩を後押しできていない現状がありました。

そこで、ボランティアの機会を得ることができなかった人たちも巻き込み、五輪・パラリンピックの持つ「人を動かす」力をうまく社会貢献に活かせないかと考えるようになりました。五輪・パラリンピックへの参画アイデアを考案して世の中に提言することで、多くの市民活動を創出することが私たちの活動の大柱になっています。

東京大会への参画アイデアを 学生が提案する

私たちの活動形態は大きく2つあります。1つは外部から委託を受けて実施するスタイル、もう1つは自ら企画し、新しい活動を生み出すスタイルです。

外部からの委託では、地域のスポーツ体験会のスタッフや、中

学・高校の五輪・パラリンピック教育の支援などを積極的に行い、千葉県の市町村や東京都の墨田区、江戸川区、台東区などの方々と信頼関係を構築してきました。

自ら企画する活動では、「スポーツ」「文化」「環境」「国際」「福祉」「教育」の6つのチームに分かれ、参画アイデアを考案しています。

例えば、「文化」チームでは、2020年に4000万人にまで増加することが期待される訪日外国人に向けて、東京・上野を拠点にさまざまな文化プログラムを実施しています。そのシンボルとも言えるのが、50年ほど前に失われた「うえの夏まつり」の盆踊りの復活です。今年8月9～11日に開催された盆踊り大会(写真2)には、3日間で計1万人が参加し、学生が軸となった半世紀ぶりの盆踊り復活という話題性と相まって、世界的に話題になりました。2020年以降も毎年続けていく予定です。

「環境」チームでは、明かりを消してキャンドルの元集まる「キャンドルナイト」(写真3)を聖火リレーの夜企画として提案すべく動き出しています。五輪・パラリンピックの思い出を「環境問題」と結びつけることで、人々の環境意識を変え

たいとの想いが私たちにはあります。五輪・パラリンピックの三本柱は「スポーツ・文化・環境」であることから、東京2020大会組織委員会の公認も受け、すでに外部のNPOとも協力してイベントを実施しています。

若者に「挑戦」の場を届ける

私たちはこれまでの活動の中で、多くの「挑戦」の機会に恵まれました。こうした経験は学生に問題意識を育みました。こうした挑戦の機会を、2020年以降の若者たちにも届けたい。そのような想いで「おりがみ」の東京2020大会のレガシーを構想しています。普通の若者が「挑戦者」になろうとしたとき、自分たちに何ができるのか。この問いのもとで、「うえの夏まつり復活プロジェクト」や「キャンドルナイト」などさまざまな企画が進んでいます。

さまざまな活動の一つひとつ試して自分の色を見つけながら、若者の小さな歩みを、想像もできないような大きな夢へと誘っていく。ゴミ拾い活動が東京2020大会を動かす大きなうねりになったように、こうした積み重ねが、地域に活力を与え、社会を良くしていくと私たちは考えています。E